ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　フシギダネ達が進化した後も、彼等は更に野生のポケモンとバトルをしていた。進化したからと言って、特訓は終わらない。寧ろ、ここからが彼等にとっては本番だった。

　三匹とも、最初は体の大きさ等が変わったせいか、少し戦い辛そうにしていたものの、二、三回戦闘を重ねるとすぐに、体の使い方には慣れたらしい。最初はぎこちなかった動きも、今はスムーズである。今は、ピカチュウやルカリオも含め、新たに進化した仲間の動きに合わせられるよう、さらに激しい特訓をしていた。五、六匹のポケモンの群れを相手に、雅也達は主に、五匹の内二匹が攻めて、残りがサポートする感じで戦っていた。それをローテーションさせて、既に二十匹近い数のポケモンを倒している。

　途中、休憩を挟みつつも、雅也達は特訓を続けていた。

　そして、ついに倒したポケモンの数が二十匹を超えた時だ。

「どうする？」

　自分のポケモンにそう聞きながら、雅也は腕時計を見た。現在、午後二時である。まだ時間はあるので、まだ帰るつもりは彼には無かった。『どうする？』と聞いたのは、『ここで特訓を続けるか、それとも、もっと強いポケモンを探しに少し山を登るか』という意味である。三匹も進化した体に慣れたせいか、ここら辺のポケモン達の強さが、彼等にはちょっと物足りなくなっていたのだ。この山は、頂上に行けば行くほど、野生のポケモンも強く凶暴になっていく。

　ただ、それ故か、雅也は山を登ることを少し躊躇っていた。一対一ならともかく、今までのように群れで動いているようなポケモン達にバトルを挑めば、一瞬のミスで大怪我を負いかねない。それくらいは小学生の雅也にも分かっていたからだ。ここならまだ安全なので、少しミスしても、それが大事に至ることは少ない。それに『物足りない』とは言っても、まだ特訓の相手としては、ここら辺のポケモンは悪い訳ではないと雅也は思っていた。

（上のポケモンは、まだ戦うには少し強すぎるんじゃないか？）

　ルカリオが主人の思考を読み取ったかのように言った。他の四匹も、それに同調するように頷く。

「うーん……じゃあ、もうちょっとここら辺で特訓しよっか」

　雅也自身も、正直ここら辺で戦う方に気持ちが傾いていたので、その意見に首を縦に振った。

（……おい、あれは何だ？）

　ここら辺で特訓を続ける事を決めてから数十分、ルカリオが首を傾げながら呟いた。

　だが、その呟きに対し、雅也達も首を傾げる。何が『何だ』と聞かれても、彼等にはさっぱり分からなかったからだ。

（ああ……すまない）

　それを言ってもらおうと、ピカチュウがルカリオの脚をつまむと、ルカリオも雅也達が何が何だか分からない事に気が付いたようだ。

（進化してから、近くにいる人やポケモンを『波導』で見ることが出来るようになったからな。ついつい、皆も見える前提で話してしまった）

「あぁ……そう言えば、そんなこと出来るようになったんだっけ？」

　この能力は、ルカリオに進化してから数日後に分かった力だ。調べてみると、ルカリオは波導の力で、一キロ先にいる人やポケモンの気持ちを読み取ったり、隠れている相手を見つけることが出来るらしい。最も、それが出来るようになるには波導を鍛える必要があるらしく、今雅也のルカリオが出来るのは、『三百メートル以内の、生きている人やポケモンを見つける』事くらいである。一応ルカリオ曰く、波導の濃さと大きさで、元気なのか死にかけているのかと、強いのか弱いのかが分かるらしい。

「で、どうしたの？　何かあった？」

（ここから離れた所に四つの波導があるんだが、その内二つの波導が極端に薄い。しかもその内の一つは人間で、まるで……死にかけている、とでも言えばいいのか？）

　それを聞いて、雅也達に戦慄が走る。

「ど……どこっ？」

　それが本当なら、放っておく訳にはいかない。雅也達は、ルカリオが指差した方向へと走り出した。

（ま……待てっ！）

　だが、ルカリオはすぐに皆を止める。何を言っているんだとでも言わんばかりに睨む彼等に対し、ルカリオは落ち着けとでも言うような口調で続けた。

（話はそれだけじゃない。極端に薄い二つの波導だけなら、私も皆のように走り出したのだろうが……どうもその近くにいる二つの波導が、極端に大きい。田島師匠と同じくらいだ）

　それを聞いて、雅也達の顔も凍りつく。ここら辺に、田島辰巳を超えるレベルのポケモントレーナーはほとんどいない。雅也達が知っている中で、田島辰巳と同レベルの強さだと感じているのは、太一のおじいちゃんの星川竜平と、出雲家頭領の出雲陰久くらいである。

　その二人なら、ルカリオもあったことがあるので、波導を見た瞬間に彼等だと分かるはずだ。だが、ルカリオはそいつが誰なのか分からない様子で、尚も首を傾けている。他にもそんなレベルのポケモントレーナーがいるなんて、雅也達には信じられなかった。

（どうする？　その波導が、さっき言った『薄い波導』に近づいていっているみたいだから、多分見つけて病院に運んでいってくれると私は思っているんだが。田島師匠並のレベルのトレーナーなら気づくだろうし、助けるのも容易だろう）

「うーん……でも一応、師匠を呼ぶ？」

（念のため……か？　だが、ここに呼んできた頃には、既に全部終わっているかもしれないぞ？）

　だが、ルカリオはそう言いながらも、本心では田島師匠を呼んできた方がいいのではないかと考えていた。

「どうしたの？」

　それは雅也にも伝わっていたようだ。怪訝そうな顔で、ルカリオの目を見つめていた。

（……いや、二つの大きい波導の動きに、私はどうも見覚えがある気がするんだ。トレーナーは全く動かず、ポケモンだけが、まるでピンポン玉のように跳ねている……とでも言えばいいのかな？）

「……？」

　それを聞いた途端、雅也の眉がピクリと動く。雅也の方も、その動きに何か感じるものがあるようで、彼等の心に、言いようのない不安が芽を出す。

（あぁ、接触した）

「……じゃあ、大丈夫かな？」

　だが、雅也はそう言いながらも、自身の言葉に全く賛同出来ずにいた。

　すると突然、困惑したようなルカリオの顔が一転、みるみる内に恐怖に染まっていく。

（おい……）

　今にも消えそうな声で、ルカリオが言う。

（これ、もしかして……襲っているのか？）

　突然吹き付けた風に、雅也達は身をブルリと震わせる。

　気が付けば、その方向に、さっき止めたはずのルカリオも含めて全員走り出していた。

　視界が木で覆い尽くされている中を、雅也達は走っていた。ちゃんとした山道を進んでいたのでは間に合わないと彼等の直感が教えていたので、目的地へは最短距離で進んでいたのだが、それ故か雅也達の体は既に、道を遮る木の枝や葉っぱのせいで傷だらけになっている。途中、野生のポケモンが襲いかかってきたことが何度かあったが、最小限の動きで攻撃を躱して、そのまま構わず進んでいった。

　近づけば近づくほど、雅也達はルカリオの見た『おかしな動きをする波導』の正体について、自分達の予想が正しいことを確信していく。未だ何が何だか分からないように困惑の表情を浮かべているポケモンもいるが、そのポケモン達に説明をしている暇は雅也達には無かった。

　だが、そんなポケモン達にも、言いようのない、不快な吐き気は感じているらしい。

　当然、雅也達にもその感覚はあった。

（……あと百メートル！）

　ルカリオが吐き気を堪えながらそう叫んだ瞬間、今まで木の枝等で覆われていた視界に、急に光りが飛び込んできた。思わず目を瞑った雅也だが、すぐにその目をカッと開いた。

「……見つけた」

　足がガクガクになるのを感じつつも、雅也は声を絞り出す。

　今、雅也達の目には、周りを岩で囲まれた中に、二人の男と二匹のポケモンが写っている。一人は大学生位の青年で、一匹はカビゴン。両者とも、満身創痍で地面に伏していた。辺りには、いくつものクレーター。大小さまざまだが、ここで何があったのかを想像させるには充分だった。

（よかった……まだ生きている……）

　息を切らせ、口に手を当てながらもルカリオは言う。

　だが、今の雅也には、そんな声は聞こえない。ただ一人、目の前にいるもう一人の男と、もう一匹のポケモンに釘付けになっていたからだ。

　そいつは、いきなり出てきた雅也達に気がついたようで、今まで大学生に向けていた目を、今は雅也達に向けている。両目……ではなく、片目で。

　白いローブを身に纏い、深緑色の目は、何を思っているのかキラキラと光っている。

赤黒い髪の毛は以前会った時と全く同じで、あれから二年も経ったなんて、雅也には信じられなかった。

　そのすぐ近くにいるのは、紺色の陸ザメ、ガブリアス。

「……久しぶり、ジャック」

　そう言った声が、風に消えた。